

磨る墨随想

今年も十一月三十日〜十二月二日、五十八回目となる、あしで會展^{あしで}が開かれるが、今や社中各々がその為の作品制作に大童^{おちわら}というところである。

我があしで會は吉井天外先生の昔から創作も然^さりながら、古典臨書の必要性・魅力の追求を標榜^{ひょうぼう}している。各人夫々に一年単位ぐらいで自己申告式テーマを持って学習し、よって毎年の社中展では三分の一程度が臨書作品という具合である。

臨書について改めて考えてみると、古來書き手としては、自分の美意識に適^{かな}う書即ち自身の書風を創るべく試行錯誤した歴史と言えようが、例えば他の芸術でも同様で、全くのゼロから頭の中に生じた自身のイメージを表出しても、まずは体を成^なさないものである。結局は卓越した先人から習い学ぶのが最も手堅く効率の良い方法であり、ひとりよがりの弊^ひから逃れることが出来る唯一の法と言えるのではないか。とはいえ、世に臨書に対する考え方、方法には百説有^あって、その度夫々成る程と頷^{うなず}かされることも多い。

そんな事なども承知で敢えて言えば、やつぱり原本を見たまに書くことを旨とし、少なくとも各人書を志して以来、初見一発でほぼソックリに書けるレベルに成るまではそうあるべきだと私は思っている。

ところがこれは簡単なことではない。個人の差もあろうが、大真面目に目をそらさずに努めたにせよ忽ち十年二十年の歲月が経つて了うもの。

だがしかしである。書三昧のこの歲月こそが誠に愉しくも仕合わせな時の流れなのだ^だと断言^{だんげん}している。

それにしても人の一生は残念乍ら極めて短い。故にこそ史上の名人達の偉大さが身にしみて感じられ、自身の来し方行く末を悲喜^{ひき}交々^{こま}に想^{おも}つてみては今日も墨を磨る。そして改めて矢張り一書は愉しい一と思^{おも}う日々なのである。

どうかあしで會面々の、この一年間の研鑽^{けんざん}ぶりを是非ともご光来の上ご批正のほどお願い申し上げます。